新潟 防災ジャーナル
安全立県宣言

＜第16号＞

(財)新潟県中越大震災復興基金「震災の記憶」収集・保全事業の一環として発行されています。

社団法人 中越防災安全推進機構
〒940−0062
長岡市大手通2丁目2番地6
TEL・FAX0258(36)8141

竹沢集落は今

復興公営住宅の一角で開かれる直売所。住民と訪れる人の間に新たな交流が生まれている＝9月6日、長岡市山古志竹沢

交流で活気

ルポ・竹沢集落

のぼりはためく「幸福市」

ずらり地の野菜 会話に花が咲き

長岡市山古志地域を抜ける国道291号沿いに毎週日曜、「幸福市」ののぼり旗がはためく直売所ができる。竹沢集落の復興公営住宅の一角を使い、近くの集落の住民たちが畑で作った野菜を持ち寄る。店の周りには県外ナンバーの車もずらり。10月で中越地震から5年となる山古志に、新たな交流の場が生まれている。

中越地震で「山古志」の名前は全国に知られるようになり、県外から訪れる人も増えた。しかし当初は集落を素通りするだけの車も多かった。「せっかく来てくれているのに、もったいない」と住民30人ほどが集まって「竹沢よりみちクラブ」を結成。昨年4月に直売所を始めた。店名の「幸福市」は、国道291号から「ふくいち」と語呂合わせした。

冬期間を除く毎週、店には1袋100円や200円のカグラナンバン、丸ナス、ウリなど季節の野菜が並び、金魚やコイを売る水槽もある。秋本番になれば焼きイモや新米も出る。朝からたくさんの人が訪れて、あちこちに会話の花が咲く。公営住宅に住むお年寄りも、開店と同時に野菜を買いにやって来る。

直売所と公営住宅が立つ位置には以前、旧山古志小学校があった。全村避難の際に住民がヘリコプターに乗り込んだ、象徴的な場所だ。

メンバーの岡市山古志竹沢の理容師、星野サツ子さん(60)は「地震から元気になったことを、訪れる人に知らせたい。店ではお茶を飲んだり、地震の話をしたり。店番している方も元気になれる」と店を見渡す。地震前から地域を訪れてきた茨木県の山本勝利さん(67)は「地域に活気が戻ってきたみたい」と目を細めた。

「観光バスが来ると大忙しさ。売り物があっという間になくなっちゃう」と話すのは同市山古志竹沢の建築業、星野勇さん(65)。

星野さんは地震後集落に戻ってから、自宅に露天風呂を手作りした。復興の力を蓄えてもらおうと、集落の人たちに開放した。いまは直売所に「露天風呂あります」という張り紙を出して、訪問者にも勧めている。

「もちろん無料。ビール1缶付けるよ」。風呂を使ってくれる人へのサービスには、交流への感謝の気持ちが込められている。星野さんの呼び掛けに、この日は千葉県から夫婦で訪れた宮嶋敏夫さん(64)が応じた。

気持ちよく湯につかりながら「山古志の復興の様子をテレビで見て、初めてやってきた。きれいになったんだね」と話す宮嶋さん。星野さんは「地震のときは世界中の人から世話になった。山古志に今度来たときには、うちに泊まっていったらいいよ」と応えた。被災から5年を迎える住民たちには、穏やかな表情が戻っていた。

あの時…

全村避難のためヘリコプターに乗り込む住民たち＝2004年10月25日、長岡市山古志竹沢の山古志小学校

住民の連携強化重要

18日、山古志で大規模訓練

長坂俊成さんに聞く

中越地震から5年を前に長岡市は10月18日、山古志地域で全14集落の住民約1400人を対象に、情報伝達や避難などの防災訓練を実施する。監修する独立行政法人「防災科学技術研究所」の長坂俊成さん(47)は、住民が連携を強め、防災意識を高める重要性を強調する。訓練の在り方などについて聞いた。

―訓練の内容はどのようなものになりますか。

「訓練は3段階。まず安否確認や消火などの初動。次に、各集落の支所、学校と情報のキャッチボールがスムーズにいくことが重要だ」

―地域で暮らす全住民を対象にした大規模な訓練になります。

「人口が減った中山間地では、非常時に集落ごとで対応することは困難だ。訓練を通して、各集落の連携を強化する必要がある」

―このような訓練は防災組織のメンバーや町内会役員だけではなく、地域で暮らす人みんなが防災について関心を持つことだ。住民が参加して訓練計画を練ることで、防災意識を高めることができる」

―さらに多くの人が防災に対する意識を持つためには、どのような取り組みがあるでしょう。

「たとえば山古志地域では梶金と竹沢の2集落で、防災ラジオドラマの制作を進めている。住民の話を基に地震発生から避難までのストーリーを作り、住民が声優として出演する予定。出来上がったドラマをコミュニティーFMで放送すれば、地域外の人にとっても防災意識の向上につながるだろう」

『行政や専門家に任せ切りにせず、訓練の準備の段階から住民が参加することが大切』と話す長坂俊成さん

防災科学技術研究所

復興通信

山古志を車で走ると、"蓬平温泉"と名のついたバスが走っているのを多く目にする。長岡の奥座敷とも呼ばれる蓬平温泉は、山古志と隣接する長岡市太田地区にある温泉郷。中越地震への被災により一時休業を余儀なくされるも、地震から2年3ヶ月後の2007年2月には全館が再開、それ以降好評を博し、宿泊客への中越地震ガイドが人気を得ている様子だ▼同地区は、3集落からなる山あいの地域。復興を遂げた温泉地の足元をふと見てみると、他の地域同様、中越地震の影響による世帯数の急激な減少など、このままでは成り行きならない地域の状況を目の当たりにしていた▼「良くも悪くも、これまで地震を除いたらほとんど変化のない地域だったと思う。しかしようやくここへ来て、危機感を感じ始めた。人が減っていくことがものすごく怖くなった。何かしなければなんねぇ」と語ったのは、今年度新たに立ちあがった太田地区復興活性会議の会長を務める、同地区蓬平の小嶋忠男さんだ。「地区ではこれまで、さまざまな復興に向けたアイデアが出てきた。しかし地区の人たちだけでは進められず、地域おこしの機運が高まるも、立ち止まってしまうことも多かった」と、これまでを振り返る▼その太田地区で、今夏からある"変化"が起きている。外から来た2人の若者が、頻繁に地区の会合や、集落の行事に出入りしているのだ。地区の方々も徐々に顔を覚えられ、最近では地区のかあちゃんから野菜などをもらったりもする。彼らは今夏、新たに加わった地域復興支援員だ。山の暮らし再生機構長岡センターに勤務し、太田地区を主担当に長岡地域の復興支援活動に当たっている。支援員の刈屋高志さん、尾身星苗さんは「自分たちに今後何が出来るのか、地域におじゃましながら探している所です。まずはとにかく顔を覚えてもらって、信頼関係を築きたい。」と現在の担負を語った▼「どういう風に変わっていくかは分からないが、昨年より今年、今年より来年が"変化"していく。そういう事が目に見える地域にしたい」という地域の思い。2人が起こしている小さな変化は、いずれ地域の"次のステップ"を生みだすに違いない。地域と地域復興支援員、両者で進める未来への模索は、今始まったばかりだ。

盆踊りの準備に、今年は新たな顔ぶれが加わった。濁沢集落のみなさんと地域復興支援員＝長岡市大田地区濁沢町